

## 小特集 チベット問題をめぐって

2008 年 3 月、中国チベット自治区のラサにおいて、仏教僧侶によるデモを皮切りに大規模な騒乱が起こった。この騒乱に対し中国政府が武力をとまなう強硬な姿勢で鎮圧に向かったことから、北京五輪の聖火リレーに合わせた中国政府への抗議活動が世界各地で相次いだ。長野市で開催される聖火リレーが迫った 4 月に入り、一般紙でも国内の仏教団体を中心に宗教界の動向が報じられるようになった。

4 月 1 日、京都府内の寺院など 1,000 ヶ寺からなる京都仏教会が、対話による平和的合意を求める声明を、中国大使館（東京都港区）とダライ・ラマ法王日本代表部事務所（東京都新宿区）に送付した（毎日・きょうと 4/17 ほか）。次いで 4 月 9 日、浄土真宗本願寺派福岡教区が中国駐福岡総領事館（福岡市）に「対話による解決」を求める要請文を提出している（西日本・福岡 4/10、読売・福岡 4/10）。

こうしたなか、長野市で開催される聖火リレーの出発地となっていた善光寺（長野県長野市）では、4 月 13 日、チベット暴動によるチベット民族と漢民族双方の犠牲者を悼む催しが行われた。チベットの人権問題の早期解決を求める「チベット問題を考える長野の会」が主催したもの（信濃毎日・夕 4/14、読売・長野 4/15）。

4 月 18 日になると善光寺は聖火リレーの出発地辞退を決定。出発地の辞退を長野市役所に申し入れた。善光寺事務局の若麻績信昭事務総長は同日の記者会見で、聖火リレーで行われるであろう中国政府への抗議活動が文化財や一般信徒に危険を与える可能性があるほか、中国政府によるチベット僧侶の弾圧に反対する立場から、出発地の辞退にいたった背景を明らかにした（長野日報 4/19、信濃毎日 4/19 ほか）。

出発地の辞退が影響したのか、善光寺の本堂（国宝）の柱や板戸の計 6 ヶ所に落書きのあったことが 4 月 20 日、明らかになった。長野中央署は建造物破損と文化財保護法違反の容疑で捜査を始めた（読売・東京 4/21、信濃毎日 4/21）。また 4 月 25 日には、善光寺近くの路上で「聖火リレーに抗議する」などとして日本刀を所持していた住所不定の自称僧侶、秋田泰嶺容疑者が長野県警に銃刀法違反の現行犯で逮捕された（産経・東京 4/26 ほか）。

4 月 26 日の聖火リレー出発式当日、善光寺は聖火リレー開始時刻の午前 8 時 15 分から、チベット暴動の犠牲者を追悼する法要を営んだ。法要は「チベット問題を考える長野の会」と善光寺の住職らでつくる「平和を願う僧侶の会」が、「日本中の人々が注目している時間に平和の思いを届けたい」として開催したもの。3 月以降の暴動で亡くなった犠牲者の名前（約 170 人が判明）、出身地、年齢が読み上げられ、30 人余りの僧侶の読経が響く本堂では、在日チベット人ら約 400 人の一般参加者が手を合わせた（信濃毎日・夕 4/26、中日・長野 4/27 ほか）。

5 月 22 日、善光寺本堂で見つかった落書きの修復作業が行われた。作業は文化庁の指導に基づき、同寺の修復を手掛けてきた同市内の北野建設が担当。落書きはほぼ消去された（信濃毎日・夕 5/22、読売・長野 5/23）。6 月 17 日、ダライ・ラマ法王日本代表部事務所のラクパ・ツォコ代表が善光寺を訪問。善光寺が聖火リレー当日にチベット暴動の犠牲者の追悼法要を営んだことに対する謝意を伝えた。善光寺が聖火リレーの出発地を辞退したことについても、「適切な判断だった」との認識を示した（朝日・長野中南信 6/18、信濃毎日 6/18）。

なお、6 月 30 日までの間には、全国 102 の仏教団体が加盟する全日本仏教会（東京都港区）や、全国の僧侶 16 名がつくる「宗派を超えてチベットの平和を祈念する僧侶の会」、さらに全日本仏教会、日本キリスト教連合会など 5 団体が組織する「日本宗教連盟」（理事長・矢田部正巳神社本庁総長）などからチベット問題の平和的解決を求める声があがっているが（読売・東京 4/23、朝日・東京 5/8、東京・東京 6/7 ほか）、仏教以外の宗教団体の動きについては、国内の一般紙・雑誌ではほとんど報じられていない。

【文責：碧海寿広】